



Title	モンゴル語を母語とする日本語学習者における指示詞の習得研究
Author(s)	Davaa, Oyungerel
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58806
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	DAVAA OYUNGEREL		
本籍（国籍）			
学位の種類	博士（言語文化学）		
学位記番号	甲 第 7 5 号		
学位授与年月日	平成19年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士		
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻		
学位論文題目	モンゴル語を母語とする日本語学習者における指示詞の習得研究		
論文審査委員	主 査	准教授	眞 嶋 潤 子
	副 査	教 授	橋 本 勝
	副 査	教 授	林 田 理 恵
	副 査	教 授	鈴 木 睦
	副 査	教 授	角 道 正 佳

論文の内容要旨

1. 本稿の目的

本稿はモンゴル語を母語とする日本語学習者を対象とした調査に基づく、日本語の指示詞の習得研究である。

従来の指示詞に関する中間言語研究は目標言語圏内で「第二言語として」日本語を学習する学習者を対象として行われている。そして指示詞の中でソ系とア系の習得が最も困難であることを指摘し、誤用は学習者の母語転移ではなく母語の違いに関わらず中間言語にみられる学習者ルールであると結論づけているものが多い（迫田 1997；上垣 1997；安 1999, 2000）。このような結果に関して、これまで扱われたことがないモンゴル国におけるモンゴル語母語話者においても同様のことが言えるのかどうかを検証することは、第二言語習得研究の分野において非常に重要であると考ええる。

中間言語は学習者言語を学習者特有の言語体系である（Selinker 1972）と捉えている。本稿は学習者がどんな学習環境であつても体系的に、規則的な言語発達を遂げるということと、学習者は言語発達の過程で同じような誤用を犯す（Bialystok and Sharwood Smith 1985）という主張をモンゴル語母語話者について検証しようとした。そして指示詞の習得に関する中間言語の習得順序が外国語として学ぶ環境（JFL）においても先行研究で述べている JSL 環境の結果と比べて同じなのかということを調べようとしたものである。

本稿ではモンゴル語話者の日本語指示詞の習得において母語知識への依存による正または負の転移の可能性についても検討することとし、具体的には日本語の指示詞のソ系とア系の文脈指示のうち最もよく使用される用法について、大きく下記の三点を提示することを目的とした。

- ① ソ系とア系の文脈指示用法の使い分けと、習得が困難な用法の難易度を探求すること
- ② 文脈指示用法について、明示的な指導が必要な用法とそうでない用法を見極めること

- ③ 日本語とモンゴル語の対照研究の結果と本稿の調査結果を踏まえながら、指示詞の指導に関する提案をすること

2. 調査方法と分析枠組み

本研究ではモンゴルにおける三大学で日本語を専攻するモンゴル語母語話者を対象に、日本語の指示詞コ・ソ・アの中間言語について下記の三つの方法を用いて調査を行った。

① ペーパーテスト（文法知識）

まず学習者の指示詞に関する文法知識を調べるために、選択式解答による文法性判断テストと翻訳問題による調査を行った。

② 自然発話（話し言葉における運用能力）

学習者が日本語の話し言葉においてどの程度指示詞が運用できるのかを調べるために、自然発話を採取した。

③ 作文（書き言葉における運用能力）

学習者の日本語の書き言葉における指示詞の運用能力を検証するために、作文のデータベースを利用してモンゴル語母語話者の作文を収集した。

上記の三種類のデータを分析し、それぞれの結果を照らし合わせた上、文脈指示の四つの用法の習得難易度を把握することを試みる。

なお、分析の枠組みは、現場指示用法に比べて誤用が多く、習得されにくい用法となっている次の四つの文脈指示用法である。

- ① 相手領域用法（ソ系）— 相手が持ち出した物事を相手側のものとして扱う用法
- ② 前方照応用法（ソ系）— 文脈において先行詞が指示詞より前に現れる場合の用法
- ③ 共有知識用法（ア系）— 対象が、話し手にとって過去の明確な直接的な知識や経験であり、さらに話し手と聞き手の共有の体験や知識が指示対象として捉えている場合の用法
- ④ 片方知識用法（ソ系）— 指示対象が話し手の直接体験や知識であり、聞き手にとっては未知である場合に聞き手に配慮して使用する用法である。この用法は本稿では③「共有知識用法」に対立させて「片方知識用法」と名づけて使う。

なお、本研究では対照研究（第3章）とモンゴル国の日本語教室教育における指示詞の指導状況（第4章）を踏まえて中間言語の検証の結果（第6章）を考察し、モンゴル語を母語とする日本語学習者に教室教育の中での明示的な文法指導として指示詞の効果な指導に関する提案をする。

3. 結果

本稿ではモンゴル語を母語とする日本語学習者におけるソ系とア系の文脈指示用法のうち、最もよく使用される用法の習得に関する基礎研究を三種類の調査に基づいて行い、その結果について考察した。

得られた結果は次の三点である。

- 1) 文脈指示用法の習得順序や難易度について：難易度は系列別に一概に決めることは妥当でなく、用法ごとにそれぞれの難易度がことなことが分かった。学習者の言語運用における用法別の正用率とその習得状況、そして各用法における誤用のタイプにもとづいて、易から難へ順に難易度をつけると次のようになる。

相手領域用法 ≥ 前方照応用法 > 片方知識用法 > 共有知識用法

- 2) 誤用のタイプから浮上する母語の転移の可能性：従来の研究にも指摘されている「ソ系とア系の使い分け」に関する「ソの代わりにア」、「アの代わりにソ」というタイプの誤用が出現したが、その他にも「ソの代わりにコ」という誤用のタイプも出現した。先行研究の仮説では「ソの代わりにア」という誤用は説明できるが、「ソの代わりにコ」という誤用は説明できない。「ソの代わりにコ」という誤用の原因を、学習者が現場指示用法のルールにそって運用していることに求めるのも無理があると考え、被調査者による前方照応用法の誤用「コ」を母語であるモンゴル語に照らし合わせると、この被調査者においてはモンゴル語の規則を援用した可能性が指摘できるのである。
- 3) 各用法における指導の必要性について：本研究で扱った文脈指示の四つの用法は、教室内では明示的な指導がなされていない中での習得状況について探求したものである。今回のデータの結果では、四つの用法に関して明示的な指導の必要性について、相手領域用法と前方照応用法は明示的な指導の必要性がないのに対し、片方知識用法と共有知識用法について明示的な指導が必要であることが指摘できた。

4. 日本語教育への示唆

1. JSL 環境下の先行研究における文脈指示用法の「ソ系とア系の使い分けが困難」であり、「ア系の共有知識用法」の習得が困難であることが、外国語として学ぶ (JFL) 環境においても支持する結果となったが、インプットの少ない環境で JFL として日本語指導における言語形式の焦点化を重視し、学習者への指示詞の指導の際、共有知識用法を片方知識用法と対立させて導入することの効率性を提案した。
2. モンゴル語母語話者への指示詞コソアの指導に関する提案：
 - (1) 対立型現場指示用法・指示詞コソアを話し手と聞き手の縄張りに基づいて、説明する。モンゴル語で、対立型現場指示用法の特徴である話し手と聞き手の対立関係を表現するとき、モンゴル語では遠称の *te*-指示詞よりも聞き手の存在、縄張りを表せる *naa*-方向副詞や聞き手への再帰を表す再帰接尾辞を使用するという解説の仕方により、学習者において確実な理解が見込まれる。
 - (2) 文脈指示の片方知識用法・共有知識用法……話し手と聞き手が指示対象となる事物につい

て体験・知識を共有している場合、ア系になり、その反対に指示対象について話し手と聞き手のどちらかが未知である場合、ソ系になるという解説が薦められる。

5. 本稿の意義と限界

日本語の指示詞の学習者の理解に関しては、文法的な知識としては明示的な知識を持っていなくても教室内外のインプットによって自然に習得されやすく、運用できるようになりやすい用法もあれば、そうでない用法もある。海外での日本語教育においては、少ないインプットの量を考えた上で、指示詞の用法によって、教室内指導が求められる。本研究の意義は自然のインプットが少ない環境で日本語を学習するモンゴル語話者に対して、より効果的な指示詞の指導を行うための貢献であり、そのために指示詞の用法による指導の力点に強弱をつけることを提案した。そうすれば、用法によってさほど時間をかけなくても理解を促すことができるし、短時間でより正確な理解と運用ができるようになることが期待できると考えるからである。

本研究は被調査者数も多くないことから今回得られた結果の一般化には制限がつく。しかしこのような限界にもかかわらず、本研究は先行研究でこれまでなされてこなかったモンゴル語話者の日本語指示詞の習得に関して新しい論点が多少なりとも提供できたと考えている。

6. 今後の課題

まず、モンゴル語話者 JFL 学習者への教室内の指示詞指導に関する提案の効果を検証することが、第一の課題である。すなわち本稿で述べた調査研究に基づいて、教育上の提案を行ったが、それが教育現場で学習者の指示詞の理解や運用に効果的であることを検証する必要があると考える。

次に、前方照応用法における誤用の原因の一つとして、学習者が母語のモンゴル語に頼る可能性があるという立場をとったが、実際に先行詞がどんなものであっても前方を照応するときは *te*-指示詞が用いられ、時には *e*-系指示詞が使えることもある。モンゴル語のこの用法の使い分けは日本語のコ系とソ系照応用法の使い分けとは異なるが、*e*-系指示詞と *te*-系指示詞の使い分けの制約は現段階では詳細は不明であり、その解明は今後の課題としたい。

論文審査の結果の要旨

1 本研究の位置づけ

本研究は、モンゴル語を母語とする日本語学習者において、日本語の指示詞の習得の困難点に関して先行研究より得られた仮説を、量的および質的データを用いて検証し、その実証研究の結果を踏まえて教育的な提言を目指した力作である。モンゴルにおいては、日本語教育学の分野でのこのような実証研究は初めてであり、先駆的な研究として評価されることが見込まれる。本研究は、日本語教育学における第二言語習得研究の中で、指示詞の習得に関する先行研究の流れをくみつつ、モンゴル語ならではの指示詞以

外の指示機能を持つ表現形式との関係にも切り込んだ、オリジナルな論考が高く評価できるものである。

また、外国語としての日本語教育（JFL）環境における習得研究として、非母語話者教員による言語教育の改善方法という点から見ても、そのような研究が少ない中で、貢献するところは大きいと言える。

2 論文の構成

本研究は、論文構成がしっかりしており、審査委員会でも高く評価された。論文では、まず研究目的などを述べた後、日本語の指示詞および指示詞の中間言語に関する文献調査（第2章）と、モンゴル語と日本語の指示詞の対照研究（第3章）を踏まえ、モンゴルで使用されている日本語教科書の分析ならびに教師へのインタビュー調査により、モンゴルの日本語教育現場の指示詞の指導に関する問題点を把握する（第4章）という前段階を経た上で、そこから得られた日本語の指示詞の習得過程における困難点に関する仮説を3種類のデータを使って検証した。指示詞の運用能力を見る為の研究手法とその結果について論じ（第5章）、その結果の考察に基づいて習得困難度に応じた指導プランを提案し（第6章）、本研究の意義と課題を論じている（第7章）。

3 調査方法

仮説を検証するため、3種類の横断的調査を行っている。すなわち、1）文法知識を試すペーパーテスト、2）話し言葉の運用能力を調べる自然発話分析、3）書き言葉の運用能力を調べる作文分析で、モンゴルの大学の日本語学習者を被調査者としてデータ収集を行っている。それぞれ単独では弱点もある研究方法であるが、質的研究方法のトライアングレーションとも言える3つの方法を採用している点は評価できるので、もっとアピールしても良かったとの指摘も行った。

4 結果考察

モンゴル語母語話者の日本語学習者にとって日本語の指示詞の習得困難な用法の順番をデータから提示し、それぞれの誤用の原因を論じている。最近の習得研究で学習者の母語の役割が見直されているが、本研究でもモンゴル語との関連がいくつかの点から指摘されている。そして、教育的側面への考察から、自然習得に任せても無理のないものと、教室内の明示的指導の必要性があるものがあるという指摘がなされているが、これはJFLの教育現場に限らず、モンゴル語を解さない日本語教員にとっても有益である。

一方で、日本語教育ならびに言語学の観点から、指示詞「コ・ソ・ア」のどれを選ぶかという問題以外にも、そもそも指示詞を使わず省略する方が適切である場合についての議論が不十分であったという指摘がなされた。また、指示詞の発達段階については議論が浅く、縦断研究がなされればもっと良かったという指摘があったものの、本研究の価値を否定するものではないと判断した。また、モンゴル語の前方照応用法におけるe-系指示詞とte-系指示詞の使い分けの法則がまだ記述しきれていないが、モンゴル語の指示詞体系の全体像が解明され尽くしていない現状では、今後の発展の待たれる課題とな

った。

5 総評

審査委員会では、指示詞の対照研究において論の甘い箇所があることや、調査紙や被調査者の人数などに問題や限界を認めるが、全体として論旨が明快で質の高い論文になっていると評価した。先行研究、対照研究、現場の問題点の洗い出し、そしてモンゴル人日本語学習者への3種類の調査を行い、教育的示唆・提案を行っている点で、モンゴル語母語話者の日本語学習者が増えつつある現在において、研究面・教育面ともに貢献することのできる有益な研究であり、博士論文として質量ともに満足できるものであると評価した。